

<学校活動部門>

長崎県宇久島平地区周辺の伝統的な祭について



長崎県立宇久高等学校
3年 大塚 誠也
山崎 さくら
山口 紗季

1. はじめに

宇久島は、長崎県五島列島の最北端に位置する外周約40kmの島である(図1)。畜産業や海産業が盛んで、最盛期には15,000人を超える島民が暮らしていた。しかし今は1,900人を切り、その大半が65歳以上という深刻な少子高齢化に直面している。この人口減少と少子高齢化によって、島で行われて

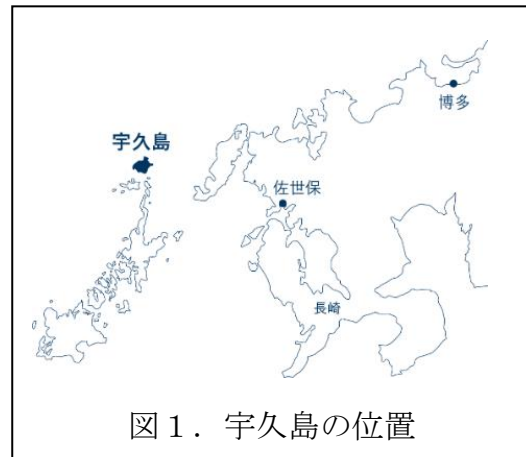


図1. 宇久島の位置

いた伝統的な行事や祭の存続が厳しい状況になってきており、祭を小規模化したり、別の祭と吸収合併されてなくなったりしている現状がある。

そこで私たちは、3学年での総合的な探究の時間を利用して、以下の2つを目的とした活動を行うことにした。

- ① 宇久島独自の伝統・文化に関する記録を残すこと。
- ② 島外に向けて宇久島独自の伝統・文化の情報を、インターネットを利用して発信し、宇久島のPRを行うこと。

この発表をきっかけに、島外の方々が宇久島に興味を持っていただければ幸いである。

2. 研究方法

まず、「八坂神社例大祭」、「神島神社例大祭」、「弘法様」の三つの祭事について、宇久島で育った私たち高校生がもともと知っていた情報や、インターネットを用いて調べた情報をまとめた。「八坂神社例大祭」、「神島神社例大祭」については自分たちの知識も少しはある状態だったが、「弘法様」は資料が全く残っておらず、何もわからない状態からのスタートだった。

以下に事前調査の内容をまとめる。

① 「祇園様」「神島様」について

<祭の概要>

八坂神社例大祭、別名「祇園祭」は7月の第3土曜日・日曜日に行われている。宇久島の住民の間では「祇園様」という名称で呼ばれて親しまれている（図2）。

神島神社例大祭、別名「おくんち」は10月の第3土曜日・日曜日の2日間実施されるお祭で、宇久島の住民の間では「神島様」と呼ばれて親しまれている。

どちらも、厄災を祓うために大人が神輿を担いで島内を歩き回る祭である。

<疑問点>

- ・祭が始まったきっかけは何か。また、いつ始まったのか。
- ・昔と今で変わったことはあるか。



図2. 祇園祭の様子

出典：長崎しま旅行こう

<https://www.nagasaki-tabinet.com/islands/events/61901>

② 「弘法様」について

<祭の概要>

高校生までこの宇久島で生活した私たちが知っている情報は、子どもがろうそくを持って、弘法大師（真言宗の開祖である空海のこと）の絵を玄関先に置いている民家やお寺を回り、お菓子とろうそくを交換する行事ということだけである。学校にある本やインターネット上には特に情報がなかった。

<祭の疑問点>

- ・弘法様という行事は、「いつ」、「だれが」、「どのような目的」で始めたのか。
- ・昔と今で行事の在り方が変わったのか。

事前調査の内容の正否の確認と疑問点の解消を目的として取材を行った。5月19日に「八坂神社例大祭」と「神島神社例大祭」の役員である森源一郎氏に（図3）、6月2日に「弘法様」を主催する毘沙門寺の和尚である兼平徹成氏に取材を行った（図4）。



図3. 森源一郎氏との取材の様子



図4. 兼平徹成氏との取材の様子

3. 研究結果

① 「八坂神社例大祭」、「神島神社例大祭」について

<祭の概要>

八坂神社例大祭は京都の八坂神社に由来する祭事であり、厄災や疫病の除法を祈ったのに由来している。1日目の午後に神島神社で祭典が行われ、神様が神輿に乗る。神様が神社から出て他所へ赴くことをご神幸といい、このご神幸は川端地区、船倉地区、佐賀里地区を通過して、現在の宇久小値賀漁業協同組合宇久支所付近の御仮屋まで行われる。この御仮屋に神様が一泊するため、夜も祭典が執り行われる。2日目午後は御仮屋から佐賀里地区、向江地区、堀川地区を廻り、再び向江地区、佐賀里地区、且の上地区、船倉地区、川端地区、松原地区、平地区を周り、松原地区、川端地区を通過して神社に帰る。その間、何度か神輿を担いだまま走ることがある。また、2年に1回は大廻りを行う。この場合は佐賀里地区、船倉地区を通り十川地区、針木地区、野方地区、太田江地区、山本地区、平地区、松原地区と、遠い地区を廻って神社に帰る。

祭の前日に神輿が通るルートに砂を道に撒いているが、これは、道しるべとするためや、お清めをするためである。神輿が通るルートには所々に鳥居があり、海水を入れた竹の筒を取り付けている。この海水はお清めのためのもので、満ち潮の時にとったものでなければならないそうだ。これは縁起が関係するのではないかとされている。また、神輿が通る家の前には、清めの意味でしめ縄が貼られる。

<疑問点>

- ・祭が始まったきっかけは何か。また、いつ始まったのか。

この祭の始まりは、宇久島の小浜地区に漂着した平家盛を、海士（あまんし、漁師のこと）が発見し、神輿を担いで助けに来たことだと言われている。平家盛は平安時代末期の平氏で、平清盛の異母弟にあたる。宇久島には、壇ノ浦の戦いで敗れた平家盛が漂着し、その後の五島列島を統括する「宇久氏」を興したという伝説が残っている。このことに関連してか、親が亡くなるなど不幸が起きてしまった人は、縁起が悪いため祭の神輿を担ぐことはできなかったそうだ。しかし、いつ始まったかどうかは分からなかった。

- ・昔と今で変わったことはあるか。

島の人口が多かった50年ほど前には、子供会の行事として砂をとってきて撒いていたそうだが、現在は役員がその場所に近い砂浜から砂をとつ

てきて撒いている。2019年からは新型コロナウイルス感染症拡大防止のために行われていないが、中止になる前から、人口減少の影響で、持ち物(祭の際に神様にお供えする物)を減らすなどの工夫しながら受け継がれている。

②「弘法様」について

弘法様はとても古い歴史があることが知られているものの、いつ、どこで、どのように始まったのか、詳しい情報は兼平氏も知らないようで、おそらく、昭和30～40年代ごろに始まったのではないかという話だった。

弘法様は3月21日に行われているが、この日は弘法大師空海が入定(にゅうじょう)した日とされている。入定とは、西暦835年弘法大師空海が永遠の瞑想に入った日とされている。取材をした毘沙門寺では、西暦2010年からこの行事に参加を始めたそうだが、野方地区、十川地区、針木地区の民家では江戸末期から始まっていたのではないかと兼平氏は考えている。今も平地区では弘法様は行われているが新型コロナウイルスの影響で少しずつ減っていつている。宇久島以外でも、同じく五島列島で、弘法大師空海が遣唐使として唐にわたる際に立ち寄った福江島でも行われている。

<疑問点について>

- ・弘法様という行事は、「いつ」、「だれが」、「どのような目的」で始めたのか。

「弘法様」はお坊さんが広めたものではなく、民間信仰で広まっていったものだといわれている。宇久の住民にとって功德(くどく、仏教用語で現在、また未来に幸福をもたらすよい行いのこと)をする行事であり、楽しみであったとされる。始まった当初にどのような善行をしていたかは分からなかったが、現在は子どもたちにお菓子を与えるという行為が功德であるとされている。

また、兼平氏がこの行事を始めた理由は、子供たちに純粋にお菓子がもらえてうれしいという感性を大切にしてほしいという願いがあるそうだ。

- ・昔と今で行事の在り方が変わったのか。

前述の通り、昔はどのようなことをしていたのか分からなかった。

4. 考察

「八坂神社例大祭」、「神島神社例大祭」の起源やいつ始まったかなどの詳細はわからなかったが、今回取材した内容から、宇久に伝わる平家盛伝説と、京都の八坂神社に由来する祭事とを結びつけて、災厄を祓うお祭を作ったのではないかと推測した。古い歴史があるお祭とのことだったので、病気などで人が死ぬことが多かった時代、神仏にすがって人々の健康を願ったのではないかと思う。

弘法様は民間信仰によって善行を積むことと、楽しみのために始まったとされる行事であるため、時代に合わせて少しずつ形を変えていきつつも、現在も子供たちにお菓子を配るというハロウィーンのような楽しむ行事であることは変わっていないのだと考える。

宇久島で進行している人口減少、高齢化が祭をはじめとした伝統行事に影響を及ぼしていることが改めて感じられた。歴史の流れと祭や文化の推移との深い関係性を垣間見ることができたため、宇久の祭を調べることが、五島列島や日本の歴史を紐解いていくことにつながると感じた。

5. まとめと今後の研究

「祇園祭」の取材の最後に森氏は、近年高齢化が進み、若い人がいないため神輿を担ぐ人が減ってきていることに触れ、「担ぐ人をインターネットなどで募集してみてはどうか」と考えているそうだが、その際は事故が起きた時の保険などの問題もあり、頭を悩ませているという。時代にあった新しい発想で現状を打破したいという思いを聞き、私たち高校生が伝統文化の継承に取り組むべきだと改めて感じた。

現在はどちらの祭も新型コロナウイルス感染症の影響で実施できていないが、実施されるようになった場合、私たち高校生がこの2つの祭の記録を残していけないか、方法を考えていきたい。また、島民の人数が年々減少している今、この行事を残していくには島外の観光客の参加が必要だと考える。島外の人々に知ってもらい、興味を持ってもらえる方法を考えていかなければならないと考える。

6. 謝辞

本研究は、森源一郎氏、毘沙門寺の和尚である兼平徹成氏のご協力をうけて行いました。ここに記して感謝いたします。